

棒踊りは、江戸時代より伝わる貴重な郷土芸能です。島津義弘公が農民の士気高揚のために朝鮮から持ち帰り伝えたとの説や、開田時に労働者を激励するためにおこなうものという伝えなどがあり、はつきりとはわかつていません。

牛根地区は、6集落ごとに歌、振り付け、手に持つ棒、衣装などが異なります。戦時中は中止されることとなり、終戦後復活しましたが、後継者不足で現在は活動を休止している集落が増えています。二川振興会では昭和五十四年から一二三会の会員たちが中心になり、復活し始めました。

毎年三月（旧暦の二月）の最初の申の日（二月祭り）に、深港の飯牛札神社の春祭りとしても奉納されます。近年では校区の運動会でも披露され、平成二十八年、二川棒踊りは垂水市指定文化財に指定されました。現代でも地域と学校、世代を結ぶ大切な絆としての役割を担っています。

集落によって 異なっていた棒踊り

二川

元上げ^①の語尾があがるのが特徴。ナタの踊り手は浴衣に白タスキ、鎌は袖襦袢に赤タスキに色物の帯を3、4本をつけます。伊達巻をまわし白ハチマキ、わらじ履き姿で踊ります。

中浜

鎌で踊る方が鼻化粧と口紅を塗っていました。男役は浴衣姿、女役は柄物で、袖が少し長い半襦袢を着て踊っていました。家の厄払いの意味もあるそうです。

上ノ原

元上げ^②の語尾が下がるのが特徴です。年上がナタ、年下が鎌を持ち、浴衣姿は男役で、勇壮に大きく踊り、白装束は女役でやわらかく小さめに踊ります。二川棒踊りと比較すると、歌詞の順番が異なったり、「焼け野のきじは かやの根に住む」のように、歌詞の一部が異なります。また、「よさこん節」という上ノ原独自の歌もあり、踊りは二月祭りと同じものを踊ります。

浮津

浮津では「鎌踊り」といい、鎌部分に馬蹄を加工したものを使っているものもあります。大きく勇壮に踊るのが特徴で、鎌部分を地面に付けた際に、意中の女性に土を飛ばすこともあったそうです。



↑昭和 57 年に奉納した浮津棒踊り

※元上げ・踏り出す前の節のこと。その間、踊り手は手や体を揺らし、体を慣らすような動きをします。

①こんころめ=馬車などに乗って行くこと / ②おさ=長老 / ③べふん仔=子牛 / ④もしょげがそっぽい=生まれて間もない子牛の頭にはまだ角が生えておらず、怪我しよぼしよほど生えている様 / ⑤とっしゃごの花=ホウセンカの花 / ⑥山太郎がね=山太郎力二。通称モズクガ二

↓子どもたちは元気よく、大人たちは勇壮に踊ります。



二川棒踊り歌詞

今こそとおる神にもの詣り

こんころめの 国分 加治木え、鹿児島え、

七旗立てて おさの目のかず、

お城^③が山は前は大海、

べふん仔^④の角は もしょげがそっぽい、

とつしやごの花は もめば手に染む、

山太郎^⑤がねは 川の瀬に住む、

焼け野のきじは 岡の背に住む、

きりしま松は 黄金の花が咲く、

清めの雨は ぱらりさらりと、

もどれとの風は そよとふきが花、

抱き寄てねるは 月が冴えこむ、

娘が前は 婿がなぐさむ、

↑唄い手の美声が響きます。



二川棒踊りを収録したDVDで
踊りの様子も見ることができます
(H26 作成)

二月祭りの流れ

公民館へ集まり、着付けする

お神酒を飲み、最初の棒踊りを踊る

飯牛札神社（深港）で奉納

・神前で棒踊りを奉納
・鎌手の踊り子が、社殿の壁板をたたいて社殿を一周（神を呼び起こす）
全員で今年一年の農作物の豊作と家内安全無病息災を祈願

各集落を巡り、各家の前で棒踊りを踊る
・各家庭では、焼酎などのお神酒を出して踊り手たちに振舞います。